

松山市立子規記念博物館個展 平成19年11月21日～25日(第1回)

★ 表題 一俳句書 子規と不器男 ー石丸繁子のロマンー (淡墨でHAIKU) 全紙

★ ご挨拶 子規がいて 不器男がいて 両雄が私に筆を持たせてくれました

その瞬間を心で感じていただければ幸せでございます

平成19年11月

石丸繁子 (淡墨でSHIGEKO) 全紙横

作品

子規

明治28年

- | | |
|-------------------|--------|
| 1 にくにくと赤き色なり唐辛子 | はがき |
| 2 草茂みベースボールの道白し | はがき |
| 3 紀元二千五百五十五年哉 | 半切二分の一 |
| 4 柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺 | 半切二分の一 |
| 5 清水の阪のぼり行く日傘かな | 全紙二分の一 |
| 6 行列の葵の橋にかかりけり | 半切二分の一 |
| 7 桔梗活けてしばらく仮の書齋哉 | 全紙 |
| 8 柿の木にとりまかれたる温泉哉 | 半切二分の一 |
| 9 石手寺へまはれば春の日暮れたり | 全紙二分の一 |

散策集

明治二十八年九月二十日午後

- | | |
|--|--------|
| 1 今日はいつになく心地よければ折柄来合せたる碌堂を催してはじめて散歩せんとて
愚陀仏庵を立ち出づる程秋の風のそぞろに背を吹てあつからず玉川町より郊外には出
でける見るもの皆心行くさまなり
杖によりて町をいづれハ稲の花 | 横長い紙 |
| 2 大寺の施餓鬼過ぎたる芭蕉哉 | 全紙二分の一 |
| 3 土手に取りつきて石手寺の方へは曲がりける | 小さい紙 |
| 4 南無大師石手の寺よ稲の花 | 全紙 |
| 5 二の門は二町奥なり稲の花 | 短冊 |
| 6 山門の前の茶店に憩ひて一椀の渋茶に労れを慰む
人もなし駄菓子の上の秋の蠅
裏口や出入にさはる稲の花 | 小さい紙 |

7 橋を渡りて寺に謁づここは五十一番の札所なりとかや

見あぐれば塔の高さよ秋の空

秋の山五重の塔に並びけり

通夜堂の前に粟干す日向哉

小さい紙

8 大師堂の椽端に腰うちかけて息をつけバ其側に落ち散りし白紙何ぞと開くに当寺の御鬮二十四番凶とあり中に「病事は長引也命にはさはりなし」など書きたる自ら我身にひしひしとあたりたるも不思議なり

身の上や御鬮を引けば秋の風

山陰や寺吹き暮るる秋の風

半切

9 寺を出でて道後の方に道を取り帰途につく

駒とめて何事問ふそ毛見の人

芙蓉見えてさすがに人の声ゆかし

にくにくと赤き色なり唐辛子

全紙二分の一

⑩ 御竹藪の堀にそふて行く

古濠や腐った水に柳ちる

水草の花まだ白し秋の風

短冊

秋の山御幸寺と申し天狗住む

四方に秋の山をめぐらす城下哉

説明文

明治29年

1 今年はと思ふことなきにしもあらず 半切二分の一

2 うそのやうな十六日櫻咲きにけり 半切二分の一

3 酒好きの昼から飲むや百日紅 半切三分の一

4 内のチョマが隣のタマを待つ夜かな 全紙三分の一

不器男

- 1 永き日のはとり柵を越えにけり 全紙四枚
- 2 かの窓のかの夜長星ひかりいづ 全紙二分の一
- 3 櫛の中くしくも明き夕立かな 全紙四分の三
- 4 一片のパセリ掃かるる暖炉かな 全紙二分の一
- 5 沈む日のたまゆら青し落穂狩 全紙二分の一
- 6 人入って門のこりたる暮春かな 全紙二分の一
- 7 山青しかへる手の花ちりみだり 全紙二分の一
- 8 うちまもる母のまる寝や法師蟬 全紙三分の一